

Title	ホーレス・マンの青年時代に関する一考察：改宗と人間観の成立をめぐって
Sub Title	A study of Horace Mann's youth : his conversion and formation of his view of man
Author	森田, 希一 (Morita, Kiichi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1990
Jtitle	哲學 No.90 (1990. 6) ,p.119- 140
JaLC DOI	
Abstract	<p>本稿は,ホーレス・マン(Horace Mann, 1796-1859)が青年時代に行った改宗とそれに至るまでの経緯を,彼自身と彼の周辺の者たちが残した書簡や日記などを使い,それを辿りながら,彼が教育の"行政官"として世に出るまでの若き日に培われた人間観とその意味について探る.</p> <p>In this paper, I would clarify some reasons of Horace Mann's (1796-1859) conversion to Unitarianism in his youth, and also ponder how his view of man was formed relation to his conversion. Then, I would mainly discuss about these four points. 1. Mann's dilemma between his religious attitude and the republican principle. 2. his boyhood: suffering from the stern doctrines of Calvinism. 3. his break with the Orthodox church and conversion to Unitarianism. 4. 1) his thought of idealism on education. 2) humanistic aspects in his religious attitude.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000090-0119">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000090-0119</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ホーレス・マンの青年時代に  
関する一考察

—改宗と人間観の成立をめぐる—

森 田 希 —\*

A study of Horace Mann's youth  
—His conversion and formation of  
his view of man—

*Kiichi Morita*

In this paper, I would clarify some reasons of Horace Mann's (1796-1859) conversion to Unitarianism in his youth, and also ponder how his view of man was formed relating to his conversion.

Then, I would mainly discuss about these four points.

1. Mann's dilemma between his religious attitude and the republican principle.
2. his boyhood: suffering from the stern doctrines of Calvinism.
3. his break with the Orthodox church and conversion to Unitarianism.
4. 1) his thought of idealism on education.  
2) humanistic aspects in his religious attitude.

---

\* 慶応義塾大学大学院社会学研究科研究生 (教育学)

本稿は、ホーレス・マン (Horace Mann, 1796-1859) が青年時代に行った改宗とそれに至るまでの経緯を、彼自身と彼の周辺の者たちが残した書簡や日記などを使い、それを辿りながら、彼が教育の“行政官”として世に出るまでの若き日に培われた人間観とその意味について探る。

## 1. マンにおいて何が問題か

マンにおいて、広義には人間全般、狭義には教育の対象としての被教育者観、子ども観は、彼の生得的な性格に負うものもあったであろうが、とりわけマサチューセッツ州教育委員会の教育長を辞任する、彼の人生の大半が過ぎるわけであるが、1848年に至るまでには、おおよそ固まっていたと思われる。いやむしろ本稿の文脈に沿って言うなら、“固まっていた”という表現よりも、我々がマンの中に看取することの可能な教育上の“ジレンマ”を抱え込んでいたと言う方が一層適切である。という言うのも、教育長時代のマンあるいは、教育の“行政官”としての彼に限って言うならば、ある特定の間観、子ども観が彼を貫き、そしてまた外に対しても、それを必ずしも徹底していた訳ではないからである。むしろ、マンの残した教育長の年次報告、講演などの言葉の端々には、彼が教育を考えていく上で、どうしても避けえなかったジレンマ（あるいは人間観、世界観の“動揺”という表現が可能かもしれない）を見て取ることができる。

このジレンマの成立過程には二つの大きな契機があったと考えられる。

一つは本稿の主題でもあるが、ブラウン大学在籍中に行ったユニテリアンへの改宗が挙げられる。これによって、マンはカルビニズムの怒れる神に代わって、愛する神を受容することができるようになり、第一義的には（無論、別の見方が可能であり、それは後述する）宗教的基盤に立脚した理想主義的な態度を自己の拠り所にすることができるようになったことである。（この場合、理想主義とは、やはり後述するが、個々人の思想や良

心、言動など人間の生き方そのもの、つまりは「善さ」を“宗教”や“神”という子どもの外側のものに置き、人間の生き方も教育もそれを理想として考えられる姿勢としておく)

第二は教育の行政官としての活動を通しての経緯が挙げられる。日曜学校組合のブックカードとの学校図書採択論争\*、あるいは1843年のヨーロッパの教育視察において触れたプロシアの教育、またペスタロッチー主義の思想との接触などを通して、彼の若き時代に培われた理想主義的な態度が貫徹できなくなってくることである。

おそらく、この直接的な要因として、マンが行政官としての立場から否応なしに共和国の原理を(別の言葉ならデモクラシーの原理)どう教育の上で尊重しなければならないかという問題に直面したことがあげられる。この共和国の原理はマンの言葉に従うならば、「自由」、あるいは「自治(self-government)<sup>(1)</sup>」である。つまり、子どもたち一人一人が自由に学び、成長、発達を遂げることによって自由なアメリカ社会が目標とする自由な共和国民が育成されると言う、「独立宣言」などによって保証された建国の理念から要請されるものであった。事実マンは次のようなことをしばしば強調している。「自由な制度が人間の精力を増加させるのは自明の理である。……独裁政府のもとでは、人間の活動は無感覚になり、麻痺させられている。共和国においては、人間の能力は強い生命によって光を放ち、抑えがたい強さによって開花するのである。<sup>(2)</sup>」

つまり、マンが直面したジレンマとは、「宗教」や「神」というものから生じる彼個人の強い理想主義的な態度と、むしろ人間個々人の思想や言動の“自由”を(行政官として)重んじた共和国の原理(デモクラシーの原理)との間に生じた葛藤<sup>(3)</sup>と言って良い。そして、こうしたジレンマを成らしめている大きな要因として、溯って彼の青少年時代に形成されたものを挙げるのできるのである。あるいは、こう考えて良いだろう。確かにマンは性悪説的な子ども観のカルビニズムに立つ、オーソドクスから離脱

して、言葉の上では対照的な性善説的な子ども観、人間観に立つユニテリアンへ変わったことは事実である。しかし、この経緯を注意深く調べていくなら、マンがこの改宗によって、“神”や“宗教”という土俵を外れたことにはならなかった。状況はむしろ反対であった。マンはむしろそうした土俵に執拗に足を残し、あるいはしっかりと我が身を据えることによって、自己を確立しようとしていたのでないだろうか。そこに後年、マンが直面するジレンマの発端があるということである。

本稿ではマンの教育上のジレンマの構造、性格やその教育的意義を解明する端緒として（また紙幅の都合上）こうしたマンの若き日に培われた宗教を基盤とした人間観の成立の背景、とりわけユニテリアンへの改宗と言う大きな精神的体験を中心にまとめてみる。その上で、そうした人間観の教育的意義について考察する。

\* これはマンが教育長になった当時（1837年）「アメリカ日曜学校組合」が公立学校の図書選定に当たっていたが、その中の一冊である『家庭の子ども』という本を、マンが宗派的であるという理由で、学校図書館への購入を反対したことから、その編集係のパッカードとの間に起こった論争である。（1827年にマサチューセッツ州で採択された法律により、特定の宗派の教義を公立学校で教えることは禁じられていた。）今日の研究では、マンの立場の方が妥当であったとされているが、論敵であったパッカードとのやりとり<sup>(4)</sup>を見ていると、マンが少年時代に培われた影を引きづっていることがわかる。

## 2. 少年時代

ホーレス・マンは1796年、マサチューセッツ州のフランクリンに農民の子として生まれた。マン家はマンの祖父が開墾したこの土地に、父親のときから定住していた。聖職者であった先祖の血を引いたマン家は、非常に敬虔であり、ピューリタンの安息日を遵守し、教会にはマン家指定の座席を確保していた\*。

\* マンの曾々祖父にあたり、聖職者であった、サミュエル・マンという人が書き残したものを、マン家は家訓として大切に残していた。例えば、そこには次のようなことが記されている。「……一日の世話と労働が終わったなら、夜の間、おまえたちを天上の父親が守ってくださるように家族を集めなさい。そして、もし、神のおきてを守ることで、神に仕えることがおまえたちの心の大きな願いであるならば、神はおまえたちに寝ている間、おまえたちを守るために天使たちをつかわし、危険なときや、非常時に、大勢の軍隊よりも一層、効果的な防御をしてくれるであろう。」<sup>(6)</sup>

しかし、マンにとって、親や兄弟と共に、毎日曜日に教会へ足を運ぶことは、決して、楽しいものでなく、むしろ心苦しいものであった。

当時、このフランクリンの町の教会には、カルビン派の牧師として有名なエモンズ博士 (Dr. Nathanael Emmons) がおり、50年以上この町で説教を続け、この町の支配者的存在であったと言われる。エモンズは徹底的なカルビニストであり、人間的な暖かさを欠いた冷厳な人物であった。そして、その高く透き通った声から発せられる言葉に、少年時代のマンは心を引き付けるような甘美なイメージを何一つ見出だすことは出来ず、彼の心はひたすら戦慄していたのである。すなわち、エモンズは、信者たちにカルビン派の人間の生得的な墮落、選別 (election)、永罰 (reprobation)、地獄の苦しみ (hell-torment) を説き、天国の幸福や道德生活の幸福について説くことはなかったと言う。マンは自分の少年時代が決して幸福でなかったと述懐しているが、その主要な原因は彼が耳にしたエモンズの説教にあった。この事をマンは後年、友人に当てた手紙で振り返っている。

「骨折り仕事、あるいは自然の経験の苦しさ以上に、私の若い時代の精神的な喜びは、神学の教え込みによって、枯らされた。フランクリンの教会の牧師は幾分か有名なエモンズ博士で、彼は人々を説教したのみならず、50年以上にわたって、人々を支配し続けたのである。彼は非常なあるいは極度のカルビニストであり、純粋な知性の人で、その論理は感情的な優しさを混じえることで、厳しさを和らげることは決してなかつた。

た。彼は完全な墮落，選別，地獄の苦しみを説いた。……その一方，天国の喜びについては，ほとんど説かず，私の記憶では，有徳の生活の本質的，必然的幸福については，一度も説いたことはなかった。日曜日に教会に行くことは，私の家族では一種の宗教的儀式であった。<sup>(7)</sup>」

こうしたエモンズの説教は，少年の感受性の強い心にどのように影響していったらうか。

「私はあまりにも字義どおりに教義を受け取ってしまい，適当な修正によって，それらを和らげることができなかつたのかもしれない。しかしながら，その教義が私の若い心の中へくる途上においては，ある数の魂は，永遠に失われ，何ものも——権天使たち (powers, principalities) も，人間も，天使も，キリストも，気高い聖霊も，神すらも——何もそうした魂を救うことができなかったのだ。……全ての子供達のように，私は教えられたものを信じた。私の活発な想像力にとって，身体的 (物理的) な地獄は生きている実在であった。苦しめられたものの叫び声を聞くことができ，あるいは救いを求めて，虚しい努力をしながら，彼らの燃え盛る魂をつかもうとして，私は手を伸ばしていたかのようであった。そのような信仰が，天国全体に暗黒のおおいを広げ，全ての美しく，栄光あるものを締め出していた。その暗黒のカーテンの向こう側に，拷問で満たされた底のない煮え立つ湖を見ることができ，そしてその生贄のものたちの咽び泣きと苦悶の声を聞くことができた。そこからの脱出の可能性があったなら，懺悔，断食，自ら課した傷，多くの殉教死の苦痛が私の運命を避けることができたならば，私の恐れはこの苦悩は軽減されたことであろう。しかし努力，有徳，希望の向こう側に，エホバのこの撤回できない判決が変わらず，永遠にあったのである。……私の心と幸福へのそうした結果は，極端に悲惨なものであった。……しばしば，寢床に向かおうとしているとき，その日の物事や友人達の顔

が、恐るべき天命、無慈悲な審判、無数の不幸なものたちにとって代わ  
 った……」<sup>(8)</sup>

カルビニズムの教義がどういう性質のものであったか、と言う問題より  
 も、ここでは少年のマンが、以上のようにそれを受け取っていたことに意  
 味があろう。それは明らかにマンの心には適したものではなく、父親が説  
 教の後に帰宅途中で、“良い話だった”と、納得するのをただ訝しげに横  
 で眺めるだけであった。

だが、少年マンの心の中では、こうした状況から逃れたいと言う気持ち  
 が募っていた。こうしたマンにまもなく生涯に渡って痕跡をとどめること  
 になる危機が訪れる。この時のことをマンは「日付も、時間も、場所も、  
 状況も」昨日のことのようにおぼえていると言う。12歳のとき彼は密かに  
 自分の中で次のように述べた。「私を縛り付けてきた呪いを壊した」つま  
 りエモンズの教義を心の中で、捨てたのである。<sup>(9)</sup> それは次の事件で一層決  
 定的なものとなる。

1810年マンが14歳の夏のある日曜日、家族はいつものように（父親は  
 前年に亡くなっていた）教会でエモンズの説教を聞いていた。そんな折  
 り、教会を抜け出し、近くの池で友人達と泳いでいた、マンの3歳年上の  
 兄ステファンが溺死したのである。この事件はマンのみならず、父親を失  
 ったばかりの母親と兄弟達に非常な悲しみとなつてのしかかった。しかし  
 ながら、エモンズは慰めの言葉一つ家族にはかけようとしなかった。葬式  
 の際、エモンズは非常に冷酷な態度で、家族に接したのである。このマン  
 の体験を後年、彼を知る友人がマンの妻に当てた手紙の中で述懐してい  
 る。

「マン氏が彼の少年時代の悲しみについて私にしばしば話してくれたこ  
 とは本当である。この悲しみの一つが彼が14歳のときに溺死した兄の  
 死だった。……愛する兄が死んだとき、彼の兄は回心の体験を経ておら



ず (not yet experienced the orthodox form of conversion), マンの苦悶する心は、彼の想像を兄の姿、形の中へとそれを包みこむように動いた。彼は母親の顔の中に、自分の息子が人間としての生命 (the mortal life of her son) を失ってしまった悲しみを越えたところの絶望を見ることができると思った。葬式の時、エモンズが慰めの言葉を与える代わりに、“回心せぬものの死” という題目で、居合わせた一群の若い人々に演説する機会を活用した。そして彼は母親が呻くように声をあげているのを聞いた。そして危機が彼の体験の中で行われたのである。……彼の存在全体は、その様な狂った創造者に向けて起き上がり、それに対する憎悪を宣言した。ハーブを奏でたり生命の木の果実を食べたりしている天国の天使や聖人たちで覆われた水晶の床、黙示録で描写されたような、彼の心に馴染み深い子どもらしいイメージ——その下にはエモンズによってしばしば強調された地獄の光景が広がっていた<sup>(10)</sup>のである。……」

このようなマンの少年時代の体験について彼が決して例外でなかったことを思い出せよう。19世紀前半までのアメリカのピューリタン社会においては、いかに神の恩寵に預かり、救済を達成するかが依然大きな問題であり、教育の中心問題でもあった<sup>(11)</sup>。子供達はマンのようにいつも天国と地獄の瀬戸際にたたされ、恐怖の苦悩に喘ぎ、自己喪失の危機を招き、幼な心に暗い影を落としたと言われる。マンもまたこの兄の死後、非常に苦悩する日々を続けることになる\*。

\* 一方、少年マンにとっては非常に人間味を欠いたように映じたエモンズはどうであったろうか。彼も実は非常に愛していた妻と二人の子どもをなくしており、同様に燃え立つ池に苦悩していた。彼の後年の回想によれば、彼は神の怒りと不幸な来世にむかう恐ろしい感覚に眠れぬ夜があったと言う。「私の心は、神の統治に対して、全てのその力でもって起き上がった」と告白する。エモンズは神が何故彼に罰を与えたかを知ろうとしていた。彼は自分が「生意気にも高い望みにふけて」、子供達は、「彼の溺愛の対象となり」そして、彼らを「愛し過ぎ

た」その結果、この事が「摂理の修正の手」となったのであると考えた。こうした厳しいピューリタンの態度を未だ、14歳であった、マンは理解することが出来ず、むしろ嫌悪と戦慄の対象となったのであろう。<sup>(12)</sup>

### 3. ユニテリアン改宗への道程

マンはこの頃から、有徳と悪、報いと罰、時間と永遠、神とその摂理といったキリスト教の倫理や教義について考え始めるようになる。<sup>(13)</sup>しかしながら、彼にとって、カルビニズムにたいする反動、嫌悪は生涯続くことになる。彼自身の言によれば、それは彼から「神に対する子としての愛、その優しさ、その快適さ、その親密さ、その巢立ち前の雛の愛情」<sup>(14)</sup>を奪ってしまった。彼が神の愛情の中に飛び込んでいこうとすると、カルビニズムの亡霊が立ち上ぼってくることを晩年告白している。

「私は神を論理的、知的、論証的なものとして見る、しかし私が、神を抱擁するとき、私が、彼の腕の中に飛び込み、言いようもない愛と敬慕をすいこもうとするとき、そのとき厳しい年老いたカルビニズムの亡霊が私の前でそれをおしやってしまうのだ。私は怯えた子どものように、その目、知識、信仰さへもが、若い頃の恐怖がその心に焼きつけたイメージを抹消するに十分ではないのだ。」<sup>(15)</sup>

こうした亡霊を背負いながら、マンは勉学に励んだ。マン自身の回想によれば、彼は15歳になるまで、年間で10週以上学校に通ったことがなかった。<sup>(16)</sup>しかしながら、父親なき貧しい農家で、彼は一年中労働に明け暮れながらも、家庭の中には知的な雰囲気<sup>(17)</sup>が漂っていた。後年の姉の証言によれば、「あなたの(マンの)毎日の生活において、あなたが少なくとも親や姉たちと一緒にいるときは、あなたは“学校”にいて、あなたの現在の知識の基礎となるものを学んでいたのです」このように家族の生活に密着しながら、勉学に励んでいたマンは、町にやってきた巡回の学校に参加し

たりして、10代の後半にはグラマー・スクールには行かなかったものの、ほとんど独力に近い形で、ギリシャ語とラテン語を学び、それを使って皮肉の一つも言えるくらいの力が付いていたと言われる<sup>(18)</sup>。

こうしてマンは、ほとんど独学にもかかわらず、1816年彼が20歳の時、ブラウン大学の2学年に編入学する（学年が2年であったのは入学試験の成績が優秀であったため）。そして在学中に、ユニテリアンへと所属するわけであるが、その経緯については、いくつかの理由が考えられる。

第一にマン自身が、後述するような、ユニテリアンの教義や人間観、社会観などに共鳴したという個人の信仰に関わる理由である。前述したように、オーソドクスからの離脱は、彼自身、12歳のとき決めていたことであった。

第二に、メッサーリの研究によるが、マンのこのようなオーソドクスの教会からの離脱は、彼が個人的に突然行なったものではなく、親の代から徐々に行われていたとする説明である。フランクリンの教会の記録によれば、1790年以降、マン一家が完全な聖餐式 (full communion) を認められていた痕跡もなく、またマンらマン家の子供達が洗礼を受けた証拠も残されてはいない。確かに教会にマン一家は座席を持ってはいたものの、ホーレス・マンが生まれたころには、既に地域社会の宗教的な儀式に積極的には参加していなかったのである<sup>(19)</sup>。

第三は、1805年に元来オーソドクスの牙城であったハーバード大学の神学部の教授にユニテリアンの牧師が任命されたことに象徴されるような、アメリカの当時の知識人の中の潮流を指摘することができる。例えば、マンが学生時代に影響を受けたといわれるジェファソンは、晩年「自由な探求と信仰に祝福されたこの国で、……ユニテリアンとして死なない人はいないと言うのは私の確信である」とまで、既に言い切っている<sup>(20)</sup>。また、ユニテリアンがまもなくエマソンを中心とするコンコードの文学者のグループに大きな影響を与えることは周知のことである。学生時代のマンに限れ

ば、恩師という立場以上に、友人として、また父親代わりとして深い付き合いのあった学長のメッサーがユニテリアンの青年達の集会に出席するようになることなどからも、<sup>(21)</sup>傍らにいたマンが影響されたことは十分に考えられることである。

ともあれ、こうした経緯があってマンが改宗したユニテリアンとはどのような宗派であったか。これはアメリカのユニテリアンのリーダーであったウィリアム・チャニング (William Ellery Channing, 1780-1842) などの説に基づいてまとめるとおおよそ次のようになる。<sup>(22)</sup>

① カルビニズムと違って、「怒れる神」、あるいは人間の罪を裁く厳しい義の神、そして「原罪」の概念を認めない宗派である。代わって、愛の神つまり恩情と親愛を説く神だけとなり、カルビニズムの重要な教義であった人間の罪というものはほとんど問題にされなくなり、性善説の立場にあった。

② 理性の尊さとその力を訴えたことである。カルビニズムでは理性と信仰は相対立するものと考えられていたが、チャニングは理性は信仰を強めると主張した。

③ 正統的キリスト教の原理である三位一体を否定した。三位一体の考え方によれば、神が「父なる神 (神自身)」、「子なる神 (キリスト自身)」、「霊なる神 (キリスト昇天後、送られた聖霊)」の三つで一体であり、唯一の神を表している。従って、イエス・キリストは神性な存在である。しかし、ユニテリアンはイエスの神性を否定し、神とイエスとの別々の unity を主張する。チャニングによれば、「一つの神がいる。すなわち父である、イエス・キリストは、この一なる神ではなく、神の子であり使者である。イエス・キリストはその力と栄えとを全て万人の父から得ており、イエスがこの世にきたのは他人に崇拜されるためではなく、魂を父のもとに、すなわちただ一人の神、宗教的礼拝の唯一の究極的な対象に、高めるためである」<sup>(23)</sup>と述べ、キリストを神ではなく、偉大なる人格、人間と

してとらえている。従って、人間が目標とできる存在である。(マンもキリストの生き様を人間の模範と考えていたようである。)

④ 人間の救いと滅びとは、神の永遠の摂理で予め決められており、人間は自らの努力によっては救われることは出来ないという予定説に代わって、人間の意志の自由が認められた。そして、ドグマや神学の問題よりも、人間の心の中に倫理的精神を育成することをむしろ問題とした。たとえば、チャニング自身、子どもの教育について次のように述べている。

「……子供達が知識を増すに比例して、彼らはそれらを上手に使用方法や、それらを人類の善に向けることを教えられるべきである。……道徳の科学が、あらゆる子どもの教育において、重要な部分を占めるべきである。倫理学の一部門は、特に政府によって強調されるべきである。法によって設けられた全ての学校は、とりわけ、国家に対する市民の義務を教えたり、自由な制度の原則を広げたり、若者を啓蒙された祖国愛へと訓練するべきである……」<sup>(24)</sup>

このように、ユニテリアンは宗派色の薄い極めて自由主義的な性格のプロテスタントの立場にあったのである。従って、マンにとってこのユニテリアンの世界観、人間観は彼の子どもの時代より、彼を縛りつけてきた桎梏から解放すると同時に、性善説的な人間観に立脚し、人道的な精神を持って社会を改革していく信念を持たせたと考えられる。彼は大学時代、古典を好んで読んだが、その中でもキケロの理神論の考えに共鳴して、真の宗教は、社会的義務を啓発すると言う考えを受け入れている\*。<sup>(25)</sup> そうした態度が、彼が人道的な立場から政治家として、また教育行政官としてやがて活躍をしていく大きな基盤であったことは確かである。マンはマサチューセッツ州の教育委員会の教育長となる一年程前の1836年に、自分の信仰の変化を姉にあてた手紙の中で次のように告白している。

「……私の本性は、決して消えることのない苦悶の世界に属する考え方に反感を抱いているのです。……もし神が存在の中で最も偉大で最も善きものであるならば、その時まさしく我々は神についての概念を押し払うべきであり、そうすれば愛はすぐに我々の心の中に立ち上がってくることでしょう。……神はいかなる我々の助けも必要としません。しかし、我々人間は、いつも助けを必要とします。……我々は確かに神を愛さなければなりません。しかし、それは神の幸福のためではなく、私達自身の幸福のためなのです。その愛を感じない個人は絶えることのない幸福の源泉を奪われることになるのです。……我々が地上にいる間は、我々の義務の荷は人間に対して向けられるのです。……私は自分の幸福を飲み込んできた墓穴の側から世界を見てきました。私は確かに愛されるに値する神の存在を教えられてこなかったことが大きく取り返しのつかない不幸だと言うことを感じました。」<sup>(26)</sup>

以後、マンが教育長として歩む道は、「アダム<sup>(27)</sup>の失墜以来、悪の芽を持って生まれてきた子供達をめぐって、ナタニエル・エモンズは正しかったのであるか。ホーレス・マンのその様な理論を論破する人生」によって特徴づけられると言っても過言ではない。

\* キケロの考えでは、人間や宇宙や神には共通の理性があり、人間も神々も法律をともにしている。そして、人間は他の動物とは異なる徳を持っており、それらは真理を探求する知、勇気、節度それから正義であり、それらが人間社会のために実践されなければならない。そうした徳から神と、国家と、親に対する義務が生じる。キケロは、共和制を理想の政体としていた。こうした考えに若いマン<sup>(28)</sup>にとっては共鳴する部分があったと思われる。

#### 4. 考 察

かくしてマンは「怒れる神」から「愛すべき神」を、性悪説的人間観か

ら性善説的人間観を、そして人間の自由意志と改善性といったユニテリアンの考えへ移行することを自分の中に確認して自己喪失の危機を脱し、いわばアイデンティティなるものを自己の中で見出だせるようになっていった。では、我々が彼の人間観、あるいは教育観の形成という視点からこの彼の改宗、宗教的態度の形成と言う事実を照らし出す時、どういう問題が浮かび上がってくるのだろうか。筆者はここで可能な二つの見方を提示したい。

### 1) 理想主義的態度の形成

ここに興味深いマンの言葉が残されている。「私の心はユニテリアンである。しかし、私の神経は依然、カルビニストである。」<sup>(29)</sup>

マンは確かに改宗をした。しかし、先にも述べたように彼が「神」とか「宗教」という問題をぼかしたのではなく、むしろその土俵にしっかりと我が身を据えたことになる。マンは、教育行政官と言う立場から、より普遍的なプロテスタント倫理に立ち、道德教育を教育の最高の位置においた。こうした道德主義に対する堅固で、厳格とも言える姿勢は、カルビニズムに支えられたピューリタニズムの伝統の継承以外のなにものでもなかったのではなからうか。「マンの若い頃の月日は、彼がその当時学んだ多くの教義を否定したにせよ、彼のパーソナリティと後の人生を深く形作っている」(タイヤック & ハンソット)<sup>(30)</sup>

マンは確かに幼い頃に怒れる神によって、強迫観念を生み、自己喪失の危機に瀕した。その結果、最晩年に至るまでカルビニズムの亡霊に苦しむことになる。彼がこうしたカルビニズムの尾を引きづったものは、とりわけカルビニズムの風土で培われた厳格さ、(道德的)絶対性、強い神経過敏、ユーモアの欠如などの気質、性格であったと言われる。<sup>(31)</sup> こうした若き日に形成された個人的な性格もおそらく大きな要因であったと思われるが、何よりも、マンがカルビニズムの風土に育つことによって、まず第一

義的には、前述した“理想主義的”態度を自分の中で堅固に形作ったと考  
えてみよう。

教育における理想主義とは、村井実によると「善さ」を子どもの外に理  
想として掲げて、それにむかって子どもは成長すると考え、成長を促すと  
ころに教育の本質を見ようとする思想である。<sup>(32)</sup> しばしば混同されやすい  
が、仮に教育過程において、子どもの自発性や内発的動機づけというもの  
が尊重され、あるいは到達度や個人の適性が配慮されたとしても、「善さ」  
(別言すれば教育のゴールといえる)が子どもの外に決められ、教育は子  
どもをそれに向かわせるものであると意図される限り、この範疇に入る。  
この態度がマンの中に看取できると筆者が判断する主要な根拠は、マン自  
身が村井の言う「善さ」(あるいはより慣習的には「善」、「善いもの」と  
いう言葉を再三、用いながらも(例えば「善をなす」こと (doing good)),  
「善について考えること (contemplating goodness) の喜び」のように、  
それについて何ら意図的な吟味を行った痕跡を見出だすことができないと  
いうことである。むしろ教育長としてのマンにとって「善さ」とは極めて  
自明なことと受け取られていたのではなからうか。つまり、それはマサチ  
ューセッツ州憲法の中で当時明記されていた「敬虔、正義の原則、真実  
に対する神聖な尊敬、祖国愛、人類愛や普遍的慈悲、禁酒、勤勉、節約、純  
潔、節度、克己……」<sup>(33)</sup> などアメリカというプロテスタント社会を支えてき  
た(あるいは非宗派的な道徳的プロテスタントの精神と言ってよかろう)<sup>(34)</sup> 諸  
徳性と理解することができる。反対に善くないもの、つまり「悪」とはそ  
うした諸徳性とは合いいれないもの、彼の文脈に沿うなら、無知、偽善、  
大酒飲み、窃盗、怠惰、暴力的革命、専制主義などが挙げられるだろう。  
(マンは事実、州議会議員の時分に禁酒の運動を推進している。)<sup>(35)</sup>

この理想主義的な態度をことさら、マンは教育長となった当初には貫徹  
しようとしていたと思われる。すなわち最初の教育長の年次報告では、  
「道徳と自然神学 (natural theology) の偉大なる教義を全く捨ててしま



ことは、人類を正反対の極へ導く強い傾向を生み、そして彼らを一つの見方に献身するものにしたたり、また別の部分での道楽者にしてしまう。……これらの致命的な極に至らしめる傾向に対して、倫理学 (ethics) と自然神学の美しく且つ崇高な真理は平衡を保つ力を持っている。」(1837年)<sup>(36)</sup>として、宗教を基盤とした道德の教育の必要を強調し、また同時期には、「自然の諸目的と諸法則に基づいた訓練によって、子どもの知性を強めなさい。秩序、勤勉、節制、正義の習慣へ……彼らの感情を訓練しなさい」(1837年講演)<sup>(37)</sup>と述べている。

無論、こうした理想主義に関して、これはマン個人だけの問題ではなかった。17世紀に入植して以来、アメリカン・イスラエルを建設すべく「荒野への使命」を背負ってきたピューリタンの伝統に支えられたアメリカ人社会<sup>(38)</sup>全てに共通する問題であったが、“厳格さ、(道徳的)絶対性、強い神経過敏、ユーモアの欠如”という性格のマンにとってそれは、より自分自身の生き方に根差していた。「神が私に利己主義の滅却、知恵の精神、恩恵の心を与えますよう。……これらの障害(これから出会うであろう)を乗り越えることのできる方法はたった一つである。すなわち、自己放棄の精神、献身の精神<sup>(39)</sup>である。」と教育長就任前夜に記した日記にはその心境が素直に伝えられている。

## 2) 宗教的態度のもう一つの方向

マンが以上のような理想主義を自分の中に持っていたことは明確であるが、しかしながら、一方次のようなもう一つの見方は成立しないものだろうか。別言すれば、信仰の中に潜在する伏線的あるいは延長的態度と言える。マンはユニテリアンへの改宗によって宗教的基盤を確かなものとした。つまり「宗教」や「神」という土俵に堅固に我が身を据えた。そのことによって、深い敬虔の情、あるいは「神」とか「絶対者」に対する畏怖の念といった宗教的心情を生み、それによって、彼の中に前記の理想主義

とは性格を異にする態度が生まれると言うことである。そうした人間の心情を少し考えてみよう。

マンの宗教的立場はユニテリアンであったが、そこにおいては人間の理性の力が尊重された。つまり、18世紀後半よりアメリカでも潮流になりつつあった理神論の立場であった。<sup>(40)</sup>従って、神や造物主の法則とは（理性的に）人間が知り得るものであるし、また人間にはそれが許されている。それゆえ人間は知ろうとする。しかしながら、人間はその法則を短い間で、知ることができようか。出来る筈がない。何故なら、造物主の法則は完全なものであるからだ。信仰に篤い、敬虔の情が深いという人間にとって、おそらくそうした神とか絶対者、完全なる法則がどういう性格のものか少なからず感じる事が可能であり、それゆえそうしたものの前に置かれた人間の持つ謙虚さ、素直さの感情を自覚することになるまいか。

適切な参考と言えるかは定かではないが、そうした心情は、自らに“愚”という形容をした日本の優れた仏教者たち、求道者たち——例えば、親鸞、良寛——の生きることへの基本的な姿勢に共通するであろうか。例えば、自らを“大愚”と称した良寛には次のような歌が残されている。<sup>(41)</sup>

「いかにして人を育てむ法のためにこぼす涙はわが落すなくに」

——遠い里より自分の所へわざわざ説法を聞きにくるものがいた。では、と思い教えらしきことを始めるが、一体自分は何をわかっていただろうか。悟りも、教えも何もないではないか。そう知ると思わず涙が零れた。——「師さらに内外の経文を説き、善を勧むにもあらず」（生前の良寛をよく知る解良栄重<sup>けらよしげ</sup>）だが、そうした態度は迷える貧農たちに深い共感を生み、「師と語りこと一夕すれば、胸襟清きこと覚ゆ」（同）こんな言葉が良寛には残されている。<sup>(42)</sup>

言うまでもなく、マンと良寛は（1758-1831）ほぼ同時代の人間であったが、立場も生きた社会も異なっている。前者は積極的に社会へ乗り出

し、公教育を改革しようとし、後者は一般社会からは身を引き、山の中のあばら屋にこもり、農夫との平凡な語らいのうちに、彼らの「胸襟」を清らかにした。良寛は信仰篤く、敬虔の念が深かったゆえに、「神」「仏」、法や法則というものの前には、人間は小さな存在であり、それゆえ“素直さ”、“謙虚さ”を忘れてはならないという自覚が生涯を貫いていた人物であったと言える。マンも改宗を体験することによって、信仰を篤くし、敬虔の念を一層深めていったならば、その深層においてあるいは潜在的に、良寛に共通するものを、つまり絶対者や造物主の法則の前での畏怖の念、謙虚さを、理想主義的な態度を形成するのと表裏のような関係で、同時に、会得していったのではなかろうか。例えば、マンは後年、友人に当てた手紙の中で、次のような回顧をしている。

「少年だった時分、私はなんとしばしば栄光なる夕日を眺めるために立ち止まり、夜には天を仰ぐために大地に寝転んだことだろう。しかし、我々の全ての感覚と燃え上がるような感受性に富んだ能力をもってしても、なんと我々は教えられたことが少ないことか。いや、むしろ我々と自然の教え (Nature's teachings) 間にはなんと多くの障害が割って入っていることか。」<sup>(43)</sup>

おそらくここには少年マンが造物主の作った自然の法則を知りたいと言う素直な好奇心が反映されていた。しかしながら、知ろうとしても、そう容易には知ることなど出来ない。何故なら、神の法は永遠で完全なものだから。——こんな感情が夕日を拝みながら、星空を見つめながら幼い胸のうちに芽生えたのではなかろうか。

ではこうした謙虚さ、素直さとは教育においてどういう態度、視点を生むと期待されるのか。それは言うまでもなくソクラテスの“無知の知”の自覚あるいは村井の言う“善くなろうとする人間”の自覚と言ってよい。つまり、造物主の法則は完全なるが故に、人間はそうたやすく知り得ない。

むしろ、人間は“無知の知”の自覚あるいは自己の未完成性を不断に自覚して、謙虚に努力すべきである。そうした態度が人間個々人に承認されなくてはならない。教育と言う場においてもまた然りである。もっともこうした態度が若き日のマンに芽生えていたとしても、その態度はマンに限れば、ソクラテスの“エロス的人間”あるいは村井の“人間主義”という域（「善さ」が予め外側から決められるのではなく、子ども自身によってそれが探られるという態度に共感して、出来るかぎり援助する<sup>(44)</sup>）にまで範疇化できるものでない。厳密に言えば、それまでの自分の理想主義が動揺した、あるいは既定の“善さ”が問い直される契機に接したという性格ものであったらう。しかしながら、筆者は、マンが後年、教育長として共和国の原理（デモクラシーの原理）、つまりは自由の原理という問題に直面した時、むしろこうした心情がそれと僅かながらも、歩調を揃え、その結果、直面した理想主義との間のジレンマを解決する端緒が開かれていったのではないかと考えている。

理想主義を表にして、自己形成していった感じの強い青年時代のマンの中にそうした態度の明確な萌芽を見出すことは容易ではない。

この問題はむしろ彼が教育行政官としてさまざまな“試練”，——例えば、「日曜学校組合」との学校図書採択の論争、プロシア教育の功罪の反省<sup>(45)</sup>、社会秩序維持の関心からの道德教育の再考——を乗り越える過程で、次第に表面化、具象化していったと考えられ、その後年の状況から溯って青年時代に培われたものを推し量ることができるのである。

#### 註

- (1) マンにとって“自由”という問題は、“道德性の育成”といった問題と表裏の関係で、公教育推進運動の大きな指標であった。彼がその教育思想の中で、「自由」という問題をどう扱っていたかについては、以下の発表において、アプローチした。「ホーレス・マン教育思想における“自由”について」

- 教育哲学会 1988/10.16.
- (2) Horace Mann “Lectures on Education” (1837) p. 37 Arno Press & New York Times, New York 1969
  - (3) 別の見方をするならば、実際のマンはこの葛藤を極めて楽観的に解決していたのではないか。つまり、然るべき教育が行われれば、然るべきプロテスタント倫理を備えた有能な共和国民が育成されるという図式を抱いていたのである。そして、おそらくこの背景にはジョージ・クームの骨相学やユニテリアンの持つ（楽観的）人間の改善性への信念が横たわっていたものと思われる。拙稿「ホーレス・マンにおける子ども観の成立」『哲学・第89集』ほか参照。
  - (4) Raymond B. Culver “Horace Mann and Religion in the Massachusetts Public Schools (1929)” Arno Press & The New York Times 1969 を参考。
  - (5) マンの少年、青年時代の経緯については次の文献を参照。 Mary Mann “Life of Horace Mann” Walker, Fuller and Company 1865. Louis Hall Tharp “Until Victory—Horace Mann and Mary Peabody” Greenwood Press 1953. Jonathan C. Messerli “Horace Mann’s Childhood-Myth and Reality” (The educational Forum, 1966/6).
  - (6) “Until Victory” p. 18.
  - (7) “Life of Horace Mann” p. 13.
  - (8) Ibid., p.p. 13-14.
  - (9) Ibid., p. 15.
  - (10) Ibid., p. 16.
  - (11) 市村尚人「アメリカにおける人間形成思想の伝統と革新」『人間形成の近代思想』第一法規 1982年を参照。
  - (12) “Until Victory” p. 27.
  - (13) “Life of Horace Mann” p. 15.
  - (14) Ibid., p. 480 (1856年の書簡).
  - (15) Ibid., p. 480.
  - (16) Ibid., p. 12.
  - (17) “Horace Mann’s Childhood-Myth and Reality” p. 162.
  - (18) “Until Victory” p. 29.
  - (19) “Horace Mann’s Childhood-Myth and Reality” p. 163.
  - (20) デービッド・B・バーク, 紺野義継訳『ユニテリアン思想の歴史—自由宗教

- の歴史の原史料による述作』アポロン社 1973年 p. 166.
- (21) “Until Victory” p. 38.
- (22) “The Works of William E. Channing” Burt Franklin New York 1970, アメリカ学会訳編『原典アメリカ史 第3巻』岩波書店, 1953年, 『ユニテリアン思想の歴史—自由宗教の歴史の原史料による述作』, ほか参照.
- (23) 『原典アメリカ史』 p. 331.
- (24) “The Works of William E. Channing” p.p. 121-122.
- (25) “Life of Horace Mann” p. 18.
- (26) Ibid., p. 48.
- (27) “Until Victory” p. 201.
- (28) 『キケロ, エピクテトス, マルクス・アウレリウス』中央公論, 1980年.
- (29) “Life of Horace Mann” p. vii.
- (30) David Tyack & Elisabeth Hansot “Managers of Virtue—Public School Leadership in America, 1820–1980” Basic Books., Inc., Publishers 1982 p. 56.
- (31) Ibid., p. 62.
- (32) 村井実『教育思想—教育の歴史をつくった人びと』放送大学テキスト, 1985年ほか参照.
- (33) Horace Mann “Report for 1848” p. 736, “Annual reports on education” Horace B. Fuller, 1868 に所収.
- (34) 市村「アメリカにおける人間形成思想の伝統と革新」参照.
- (35) “Life of Horace Mann” p. 69, “Until Victory” p. 7.
- (36) Horace Mann “First Annual Report” p. 424, “Life and Works of Horace Mann” Vol. 2 Cambridge 1867 に所収.
- (37) Horace Mann “Lectures on Education” p. 35, Arno Press & The New York Times 1969.
- (38) 柳生望『アメリカ・ピューリタン研究』日本基督教団出版局 1981年参照.
- (39) “Life of Horace Mann” p. 80.
- (40) S. Alexander Rippe “Education in a Free Society An American History” p. 61 Longman 1967.
- (41) 東郷豊治編著『良寛歌集』創元社 1963年 p. 288.
- (42) 同上 p.p. 286–287.
- (43) “Life of Horace Mann” p. 11.
- (44) 村井『教育思想—教育の歴史をつくった人びと』ほか参照. なお, この問題

## ホーレス・マンの青年時代に関する一考察

つまりマンの中に人間主義的な側面をどのような形で認め得るかという性質の問題については、人間主義学会（1990/3/10）において村井氏をはじめ、参加者の方から幾つかの有力な示唆を頂いた。

- (45) 1843年のヨーロッパ教育視察で見たプロシアの教育に対するマンの評価は二面的である。その教室で生き生きと学ぶ生徒達の姿を通して教育を包むテンダーな空気の重要さに気付かされた反面、同じヨーロッパの教育報告（1843）においては、とりわけプロシアの宗教教育のあり方を強い批判の対象としている。つまり、マンによれば、プロシアにおいては国家が人々の信教、思想や良心の自由を奪い、宗教教育は国民教化のための都合の良い道具となっており、国民は「強制宗教の受動的な臣下」となることをやむなくされている。おそらくそうした批判を通してマンは宗教と教育の問題に一層深く立ち入ることになり、自己の理想主義が問い直される大きな契機を得たと考えられる。Horace Mann “Annual reports on education” ほか参照。